

女性トリックスターは、ここに——  
*The Last Report on the Miracles  
 at Little No Horse*

津 田 直 子

は じ め に

“Where Are the Women Tricksters?”の中で Lewis Hyde は、「規範となるトリックスターのすべてが男性である。」(185)と指摘している。しかし、これに対して我々は、Louise Erdrich が著わした *The Last Report on the Miracles at Little No Horse* [以下、LR と表記する] (2001年出版)の主人公であるダミアン神父こと Agnes DeWitt の生き方を検討し、これを通じて女性のトリックスターが立派に存在しうることを指摘したい。

Erdrich は LR に先立ち、ノース・ダコタ州のチッペワ族の保留地を舞台とする一連の作品群を出版しているが、そうした作品でお馴染みのダミアン神父 (1996年現在では 100歳を超える) が、実は女性であったという衝撃の告白から LR は展開する。

アメリカ先住民の部族神話には様々なトリックスターが登場するが、チッペワ族においては Nanabozho (他に別称としておよそ 6つの名を持つ) と呼ばれるトリックスターがいて、「部族主神から人々に遣わされた」(Jacobs 73)カルチャー・ヒーローとして活躍する。Agnes/ダミアン神父は、こうした Nanabozho 的な要素と共に、「カトリック」, 「女性」という要素も合わせ持つ異例のトリックスターとして描かれている。本稿では女性論と関わらせて、彼/彼女の繰り広げる新しい世界を考察することとしたい。

## 1. Symbolic/Semiotic Order とトリックスター

「神話的いたづら者」であり、神からの「使者」でもあると言われるトリックスターの最大の魅力、そして謎は、「最も神聖なものから最も卑俗なものへと転換する」(Radin 245) といった「両義性」にあると言えよう。このトリックスターが持つ「両義性」は、Hyde によれば、神話における男性トリックスターの母に対するアンビバラントな心理と関連づけられる。つまり、彼らには、母からの影響力に対し「打ち勝ちがたいが、遠ざかりもしない」(191) という心理が働いていることに Hyde は注目し、そのことが、彼らの「両義性」に関係していると論じているのである。

この Hyde によるトリックスターの心理分析は、「父の領域に参入しながらも、心の奥底には常に母が存在している男性心理」と捉えることができよう。また、そうした解釈は、Julia Kristeva が主張する Symbolic (父の領域) と Semiotic (母の領域) から成る Symbolic/Semiotic Order との深い関係性を想起させる。

Kristeva は、幼児が、母子融合的な関係にある領域 (Semiotic) から踏み出して、法と秩序を体現する父の領域 (Symbolic) へと進出することで、社会的存在になると説明する。しかし、その際、Semiotic (下線は筆者による。以下同様) は Symbolic の成立により消去される訳ではなく、抑圧された形で潜在して Symbolic と共に「意味生成の過程で機能する」(Moi 118)。また、通常の言語活動では、影武者的存在であり、「Symbolic の母胎」(西川 156) でもある Semiotic は、「何らかの理由で、発話者の制御から逃れ出る」(Bertens 167)。例えば、「ファンタジー」(Moi 102) が、そうしたものであり、それは、「Symbolic の裂け目から、音楽や詩」(Moi 118) といった芸術活動等となり姿を現すとも説明している。

Hyde のトリックスターに関する考察をこうした Symbolic/Semiotic Order の枠組みで捉えるならば、「トリックスターは、Symbolic の裂け目を見出し、

抑圧されて不可視であった Semiotic を人々に想起させて、Symbolic と Semiotic が共に機能する新しい世界を開示するアーティストである」というように定義し直すことができる。さらに、こうした解釈は、山口昌男氏によるトリックスターの説明——「日常生活の核を逆転し、[新しい世界を] 開示する」(342)——と重なりをみせることから、考慮する価値があると思われる。

こうした **Kristeva** 理論に基づくトリックスター観から女性トリックスターである **Agnes** / **ダミアン** 神父を見直していくと、はっきりとしたパターンが姿を現してくる。さらに、このパターンを読み解けば、**LR** が、「結局のところはコック小説」(**Beidler 181**) などではなく、あらゆる紛争を解決へと導く方向性を示す興行きの深い小説であることが明らかとなる。

## 2. Symbolic の裂け目

カトリックの神父を女性が、しかも、80 有余年にわたって務めたということだけでも異常事態であるが、この **Agnes** / **ダミアン** 神父は、まさに常識や「日常生活の核を逆転」させて、**Symbolic** を統御している法や秩序に揺さぶりをかける存在である。そもそも、**Agnes** が、溺死した本物の **ダミアン** 神父になりすますこと自体が欺瞞行為であり、その上、教区民に対し洗礼などの儀式を長年にわたって実施していたとあっては、彼／彼女は、懲役刑も覚悟しなければならないはずである。いや、それどころか、彼／彼女は、カトリック界においては「殺人罪にも匹敵するような」(200) 罪——派遣されたウェックル神父との性的な関係——まで犯している。

さらに、部族信仰とカトリックは二律背反的で、一般論としては、両者の「併合は不可能」(**McKinney 157**) だとされているが、**ダミアン** 神父は、「両立できる」(49) と断言し、カトリックの教義や戒律を变幻自在に曲げて両立を図る。例えば、彼／彼女の幻視するキリストの姿は、「鹿角で作ったスプーンを持って」(123) おり、さらに、彼／彼女は、キリスト教神学の根本的な概念である「三一神」の「三」に、「部族の霊を加えて」(182) 「四一神」に

してしまう。また、彼／彼女は、改宗を強いず、**Ojibwe** [チッペワ族を意味する部族語の呼称] 流の伝統的儀式や神話を「異教的」ともみなさない。それどころか、彼／彼女は、積極的に **Ojibwe** 語を使い、スウェット・ロッジのような **Ojibwe** の風習を取り入れる。さらに、部族の長老であり、**Nanabozho** 的存在でもあり、改宗を受け入れなかった **Nanapushu** を「私の師匠、親友、司祭」(310) とまで言明している。

このように様々な「戒律破り」を平気で行う **Agnes** / ダミアン神父を、読者が「似非神父」として軽蔑するかというと、全くそうではないであろう。我々は、皆、**Little No Horse** には本物のダミアン神父ではなく、**Agnes** のような神父が必要だったのだと確信する。このように、「贗物が本物以上の価値を持つ」ということを知らせる行為は、トリックスターの得意技と言われる「日常的価値体系に対する脅威」(山口 306) であり、それはまた、「**Symbolic** の裂け目」をも意味する。**Symbolic** の住民は、「記号」(神父の服) が「内容」(神父の本質) を意味すると信じ、また、「記号」により価値判断をすることを日常的に行っているが、**Agnes** / ダミアン神父は彼らに、こうした思考回路や日常的な行為を疑惑視するように仕向けている。また、**Agnes** / ダミアン神父は、「記号」によりシステムティックに機能する社会や組織が形骸化した歪なものであること、そして、カトリック界にその姿が見られることを明らかにしている。

そうした例としては、信仰の本質を忘れた「改宗」の強制が真っ先に挙げられる。それはまた、アメリカ先住民にとってトラウマに他ならない。カトリック教団 [イエズス会] は、過去に「洗礼を受けなければ地獄行き」(**McKinney** 155) と彼らを脅し、強引に改宗させている。一方、ダミアン神父は、「改宗」を「最も罫に満ちた考えであり、破滅の最も美しい形態」(55) であると定義し、懐疑的に眺めている。そして、シスター・レオポルダの部族民に対する異常なまでの「改宗熱」(339) を苦々しく眺め、「改宗により罪があがなわれる」という考えを強く否定している。

また、戒律重視で女性の僧職を認めないといった男性中心主義的なカトリッ

クの体質に対しても **Agnes**／ダミアン神父は、再三、揺さぶりをかけ、**Symbolic** の「裂け目」を読者にさらしている。そのことが最も端的に示されているのが、**LR** の最後で紹介されている **1997** 年に新任のローマ法王から届いた [現実にはあり得ない] ダミアン神父宛てのファックスであろう。

ファックスが届くまでの経緯を知っている読者は、この文面に苦笑を禁じえない。**Agnes**／ダミアン神父は、罪人に「赦し」を与えることこそ「召命」(309) と考えていた。そのために彼／彼女は、自分の与えた「赦し」が無効になることを恐れ、正体を伏せたまま湖底に身を沈めてこの世を去った。この神父の生前の悩みの種は、シスター・レオポルダの殺人を犯したという告白であり、彼女にも「赦し」を与えるべきか否かを考えあぐね、何通ものレポートをバチカンに送り続けていたが、それは、すっかり無視されていた。そして神父の死後、最後のレポートに対する返事が、バチカンからファックスで届く。

その文面は、ダミアン神父とカトリック界の違いを明白に示している。ダミアン神父は、「告解」と「赦し」を神父職の最優先に考え、そこから発生する問題と真剣に取り組んでいた。そして最後には、キリストのように人々の罪を背負い、自身を犠牲にして「神の愛」を示した。一方、バチカンは、そうした神父を嘲笑するかのようになり、神父の送ったレポート全てを「システム一新」作業のため「不注意にも抹殺してしまった」(354) と告げている。こうした形骸化したバチカンの姿に、読者は **Symbolic** の「裂け目」を見る。

### 3. Semiotic と「癒し」

**Agnes** は、ダミアン神父になりたての頃、「地平線のない、限りない意味」を読み取る能力が「本質的に備わっている」(65) と自覚する。このような彼女の自覚は、彼女が、通常の言語作用の行われる「父の領域」(**Symbolic**) と共に、「**Symbolic** の前提条件」(**Moi 103**) である「母の領域」(**Semiotic**) をも意識していると受け止められる。そして、「滋養を与え、母のよう」(**Moi 94**) に **Symbolic** の成立を準備してやる **Semiotic** は、「母になぞらえる」(西

川 127) 領域であり、したがって、「母親的な愛」を想起させる領域と言えるだろう。

興味深いことに、**Agnes**／**ダミアン**神父は、キリストを「母親的な愛」により「癒し」を施すイメージで捉えている。**Agnes** が溺死を免れ、キリストからスープを食べさせてもらい癒される光景が描かれているが、この時のキリストと **Agnes** は、まるで母親と幼児のような関係であり、キリストは、「彼女の唇までぬぐってやる」(43) ののである。

こうしたことから、**Agnes**／**ダミアン**神父の「母の領域」には、まず、「キリストの愛」と「癒し」が入る。そして、この「癒し」に関連して、**Nanabozho** も「母の領域」に加わる。なぜなら、彼は、「部族の人々に、狩猟と癒しの賜物を与えるために」(**Jacobs** 72-3) 地上に遣わされたと言われているからである。

このように **Agnes**／**ダミアン**神父が意識する「母の領域」を考えると、母—癒し—キリスト—**Nanabozho** が結びつき、「母／女性」、「キリスト」、「**Nanabozho**」というセミオティックな 3 要素を通じて、**Agnes**／**ダミアン**神父が、チッペワ族の「生き残り」を果たす図式が浮上する。この、一見ミスマッチのような 3 要素を融和させたトリックスター像は、20 世紀の部族神話としてふさわしいと言えよう。

チッペワ族は、父系制社会とはいえ、その中で「母」は家族の中心であるばかりか、「あらゆる関係性の源」(**Tanrisal** 71) とされている。また、アメリカ先住民は、大地を“**Mother Earth**”と呼ぶことから明らかなように、「母」を大地と関連させ、両者に深い敬意と愛着を抱いている。こうした中で、**LR** を含め、**Erdrich** の作品の殆ど全てにおいて、部族の伝統であった緊密な母子関係が壊され、母を失う、あるいは歪んだ母子関係となった姿が描き出される。そうした姿は、「大地それ自体が泣いている」(158) という表現が示すように、土地を含めたあらゆる喪失と、求心力を失った部族の危機的状況を表象していると言える。

ダミアン神父が保留地に到着した 1912 年当時は、疫病が猛威をふるい、多

くの命が奪われた。かろうじて生き残った **Nanapush** と **Fleur** の姿は、「喪失でできた殻」, 「死者の声」(80) と表現されており, こうしたことからも, 部族の壊滅的な状況が十分に理解される。この疫病は, 保留地に「伝道師たちが持ち込んだ」(81) ものであるとされているが, これに限らず, 部族の外から中へと侵入した様々な要因により伝統的な暮らしは脅かされる。例えば, 土地私有の観念のない部族民の個人に対し土地を割り当てる政策 [1887年に施行されたドーズ法] により, 部族の土地や森林は, あっという間に材木会社, 土地開発業者や白人農民によって奪われたし, さらに過去をたどれば, フランス系の毛皮業者がやって来てバッファローの乱獲をし, 部族の宝であったバッファローは, 姿を消していった。虐殺されたバッファローは「この世の終わりを見た」(158) とダミアン神父が語る時, 世紀末的な光景が読者の目に迫ってくる。

外部からの侵入者, 侵入物は, こうした自然破壊だけにとどまらず, 紛争を招き, 部族一家族一個人の絆を次々と断ち切り, 部族崩壊の危機に追い込んでいく。例えば, それは, 部族の家同士の間「純血」(**Kashpaw** 家, **Pillager** 家, **Nanapush** 家)対「混血」(**Morrissey** 家, **Lamartine** 家, **Puyat** 家, **Lazarre** 家), 「伝統保守」対「同化」という対立を生じ, さらに利害関係が加わり, 互いに反目し合うこととなる。また, 政府は, 部族の子供を全寮制の学校に入学させるという政策を実施し, 家族間や母子の絆が絶たれていく。**Fleur** は, やむを得ず, 娘の **Lulu** を寄宿学校に入れるが, **Lulu** は, 迎えにきた母に, 「彼女 [**Fleur**] は, 私のお母さんじゃない」(252) と言う。彼女のこの言葉が, 歪められた母子関係を代弁している。

こうした部族一家族一個人の絆の断絶は, チップワ部族自体の存立のみならず, 個人の存立にも関わる大問題である。なぜなら, アメリカ先住民は, 個人のアイデンティティーを「自分の家族, 部族, コミュニティーにより明確にする」(**Jabobs** 188) からである。母や家族との絆の断絶が招くアイデンティティーの危機は, 多くの登場人物に描写される。例えば, 気が狂ったように地面に穴を掘る **Mary Kashpaw**, 次々と異性関係を持ち, 8人もの子供を生む

Lulu, あるいは、森の中に1人で引きこもり、イカサマのウィスキーを密造して売りさばく Marie などの姿が、その典型として挙げられる。

しかし、Erdrich は、このような「母との縁が薄い子」を、ただ犠牲者とするのではなく、彼らがサバイブしていく姿を描く。LR においても同様である。後にダミアン神父となる Agnes も、「家を飛び出し修道院に飛び込んだ」(63) というからには、母との縁は薄かったに違いない。また、一時はアイデンティティーを喪失したかのように見えた Mary Kashpaw, Lulu, Marie も、ダミアン神父に癒されて、しっかりとした自己を持つ逞しい女性へと変貌を遂げている。さらに、Nanapush の亡き後、Agnes/ダミアン神父を含むこれらの女性たちが、部族で欠くべからざる役割を果たす構図には、ジェンダーの壁を破った新しい社会が投影されている。

Agnes/ダミアン神父が、Nanabozho の「癒し」の力を伝授されたのは、神父が「師匠」と呼ぶ Nanapush からである。部族の長老でありトリックスターでもある Nanapush は、神話の Nanabozho もどきに、ある時は下品に、またある時は好色な言動で部族民や読者を笑いの渦で包んでいく。その圧巻は、彼の葬式のシーンであろう。彼は、妻の料理で腹を下し、下痢に苦しんで死ぬが、強烈な放屁と共に生き返り、弔問客に、「あちらの世界には、政府の小役人はいないよ」(294) と知らせる。さらに、死の直前まで喧嘩をしていた妻とベッドインして、やっと本当に死ぬ。このようなスカトロロジーや好色話は、トリックスター神話に特徴的なことであり、その点については、「日常世界の美的・倫理的秩序に対する侵襲性が……呪力を持つ」(山口 318) という解釈も見られる。たしかに、こうしたことも言えるであろうが、Nanapush の場合は、「空ろな目をして平原を歩く物乞い」(260) と表現されるほどの悲惨な状態にあったチッペワの人々を、滑稽な行為や話で癒したことに注目すべきであろう。

Nanapush は、Lulu の凍傷にかかった足を「昔ながらのメディスンで救う」(269) といった「治癒師」としての力を持つことも見逃せないものの、部族の語り部として人々を精神的に癒す心理療法が、物理療法以上の効果をも



たらしただであろう。彼の語る部族神話や昔話は、「迷子」や「捨て子」のようになっていた人々の心を、無事に母の下に帰す役目を果たしたと考えられる。

このように、部族の人々に「母」を思い出させ、「母」に向わせて彼らを癒す **Nanapush** は、非常に「セミオティック」であると言える。また、そうした「セミオティック」な特質は、うら若い女性であった頃の **Agnes**／**ダミアン**神父にも顕著に認められる。彼／彼女が、修道院でシスター・セシリアと呼ばれていた頃、ショパンに激しい恋心を抱き、ついには、裸でピアノの前に座るまでの性的な高揚を感じている。このような彼女の「ファンタジー」の実体化は、**Semiotic** の噴出とみなされる。**Semiotic** に敏感な二人は、強い絆で結ばれていく。そして、この二人の結びつきが、**Nanapush** の後継者として新しいトリックスター、**Agnes**／**ダミアン**神父を生み、やがて、彼／彼女は、チップワの人々のカルチャー・ヒーロー、及び、「救世主」となっていく。

#### 4. 「最も小さなモノは最も大きなモノと繋がる」

**Nanapush** と **Agnes**／**ダミアン**神父の「結びつき」が明らかに示すように、我々が **Semiotic** を感じ取れば、**Symbolic** の「記号」, 「差異」, 「境界」は絶対的な意味を失い、その代わりに「関係性」に気づく。そのことは、**Nanapush** の養女である **Fleur** と **Agnes**／**ダミアン**神父との関係においても明らかに見られる。**Fleur** は、その昔、部族の間で「真の治癒者であり、神秘的な生存者」(**Jacobs 140**) として畏怖の念を持って見られていた **Pillager** 家の末裔であるが、**Nanapush** と同様に、伝統的な部族の価値観を保守し、改宗していない。しかし、**Agnes**／**ダミアン**神父と **Fleur** が互いに深く理解し合っているということは、以下のシーンにより明らかにされている。

**Agnes**／**ダミアン**神父は、**Fleur** と **Lulu** のこじれた関係を仲介しに **Fleur** を訪問するのだが、神父は、ビーズ刺繍をする彼女の顔つきから、以下のように彼女の心を読み解く。

**Fleur** は、「何物も見逃さない」知的で神秘的な力を持っているので、「最初から彼の秘密——女性であること——を知っていたが、そんなことは、**[Fleur にとって]** 問題とはならなかった。」(263-4)

そして、実際、彼女は何も言わず、仕上がったビーズ刺繍の作品を神父に手渡して贈る。一方、神父は、無言の **Fleur** から、いかに彼女が **Lulu** から拒否されようとも「彼女は **Lulu** を愛している」(264) ことを見抜いている。

**Fleur** は、全てを見通す神秘的な力を持つが、そうした「神秘的な力」とは、**Symbolic** 圏外の **Semiotic** を知る敏感な力であろう。また、こうした彼らの結びつきは、「言葉」のみならず、「人種」、「性」、「信仰」といった **Symbolic** の様々な記号を全く問題とせず、また、「境界」をも取り払っている。トリックスターは、「境界の横断者」(**Reesman xx**) と呼ばれ、「物事の関係性を我々に気づかせる」(**Reesman xxi**) とも言われるが、**Agnes** / **ダミアン** 神父には、正に、そうした表現が似つかわしい。そして、彼 / 彼女が、**Semiotic** に敏感であるからこそ、そのように表現されるということも指摘されよう。

また、チッペワ族を含め、アメリカ先住民は伝統的に、「物事の関係性」を **Symbolic** のレベルを超えて想像力豊かに見る、ということも踏まえておかなばならない。実際、**Agnes** / **ダミアン** 神父は、「最も小さなモノ [生物] が、最も大きなモノ [チッペワ族の主神] と繋がっている」(315) という **Ojibwe** の哲学に深く感銘を受けている。そして **Agnes** / **ダミアン** 神父は、こうした **Ojibwe** の哲学を知ることで思考の幅を広げ、より柔軟な発想をするようになる。その結果、神父は、「レオポルダでさえ赦す」(346) という結論を出し、長年の苦悩から解放される。**Agnes** / **ダミアン** 神父は、**Ojibwe** の哲学から、すべての生物が関係性のネットワークにより存在することを知り、また、そのネットワークの創造主——神 / キリスト / 部族主神 / 母——の愛を感じたのであろう。

こうしたことから、「関係性に気づく」ことは、人を限られた思考に執着することから解放し、そのことは、また、「赦し」や「許し」にも繋がること

明らかとなる。**Marie** や **Lulu** も関係性に気づいたことで、「母に対する恨み」から解放されたのではなからうか。

他方、同じカトリック界の住人でありながら、**Agnes**／ダミアン神父と対照的に描かれているのが、**Pauline**／シスター・レオポルダである。彼女は、最後まで「関係性」には気づかず、孤立し続けた。その大きな原因は、2世代にわたる母娘間の「殺意を抱くほどの憎しみ」(157)を受け継いでしまったことにある。そのことから、彼女は「母」を意味するものを一切拒み、自分が「母」であることすら認めようとせず、母的なものをすべて抹殺しようとした。彼女は、**Marie** を出産していたが、「死産」(126)であったと嘘の告白しており、また *Tracks* においては、分娩を拒否しようとしていることなどが、その証明と言えよう。

さらに、彼女がシスターとなってからは、実の娘である **Marie** の手をフォークで突き刺すなどの虐待をした上に、**Marie** の傷を「聖痕」(158)だと大嘘をつく。その結果、彼女は、「奇跡」を起こすという評判がたち、彼女の死後は、「聖人」に加わることさえ検討されることとなった。いわば「偉大なる俗人」といった彼女が「聖人」呼ばわりされるという筋立てに、読者は風刺画を見る思いがする。

シスター・レオポルダの自虐的で大袈裟な修行に対し、**Agnes**／ダミアン神父は、「強欲な神との関り」、あるいは、「十字架にかけられたキリストの真似」(238)と批判する。「嘴の尖った貪欲なサギ」(108)などと例えられるシスター・レオポルダは、非常にグロテスクに描かれ、滑稽ですらある。彼女の信仰には「愛」がないのに、彼女は、ひたすら信仰の篤さを示すために「生贄となった犠牲者」(238)を演じ、「ヒロイズム」(239)に酔う。彼女のこのようにカリカチュアされた姿は、イエズス会の伝道師が「奇跡」を起こしたように見せかけて先住民を「改宗させた」(McKinney 155)ことのパロディーであろう。

一方、「母の領域」を否定し、ひたすら **Symbolic** の「記号」や「マーク」に執着するシスター・レオポルダの姿は、「亡者」そのものである。彼女のこ

うした姿は、「母子関係の無効」——それは、チツペワ族にとって、「万事の最後」(158)に他ならない——により生じた怪奇現象とでも表現できよう。このことから、部族にとって、「母」の「重要性」や「存在意義」が再確認されるのである。

これまで論じてきた道筋をたどると、チツペワ部族の存続の鍵は、「母」、すなわち「女性」が握っていると言えるであろう。そして *LR* は、「女性」を中心に部族文化や伝統的価値観が継承される姿が描かれていると言っても過言ではない。これまで、「サバイバルのための折衷主義」(馬場 116)を取り入れて持ちこたえてきた部族文化が、今後、さらに押し寄せてくることが予測される時代の波と、いかに平和的に折り合いをつけられるかは大問題である。こうした難題に対し、女性トリックスターである *Agnes* / *ダミアン* 神父は、読者に **Semiotic** の存在を気づかせて、問題解決の方向性を示唆している。つまり、**Symbolic** では「異種」だと規定される二者間の「違い」に固執するのではなく、**Symbolic** の地平線の下での「見えない繋がり」を想像することこそが、大切なのではなからうかと。

### Works Cited

- Baba, Minako (馬場美奈子). 「『ビンゴ・パレス』におけるトリックスターの語り」『人文論究』第 47 巻第 4 号 (1998) : 109–22.
- Beidler, Peter, G. Rev. of *The Last Report on the Miracles at Little No Horse*, by Louise Erdrich. *American Indian Culture and Research Journal* 25. 2 (2001) : 179–82.
- Bertens, Hans. *Literary Theory*. London : Routledge, 2001.
- Erdrich, Louise. *The Last Report on the Miracles at Little No Horse*. New York : HarperCollins, 2001.
- . *Tracks*. New York : Henry Holt, 1988. New York : Perennial, 2001.
- Hyde, Lewis. “Where Are the Women Tricksters?” *Reesman* 168–84.
- Jacobs, Connie A. *The Novels of Louise Erdrich : Stories of Her People*. New York : Peter Lang, 2001.
- McKinney, Karen Janet. “False Miracles and Failed Vision in Louise Erdrich’s

- Love Medicine.*” *Critique* (Atlanta, Ga) 40. 2 Winter (1999) : 152–60.
- Moi, Toril. Ed. *The Kristeva Reader*. New York : Columbia UP, 1986.
- Nishikawa, Naoko (西川直子). 『クリステヴァーポリロゴス』 東京：講談社, 1997.
- Radin, Paul, Karl Kerényi, and C. G. Jung. *The Tricksters—A Study in American Indian Mythology* : Trans. Soichi Minagawa, Hideo Takahashi, and Hayao Kawai. Tokyo : Shobunsha, 1974, 1999. (ラディン他『トリックスター』 皆河宗一・高橋英夫・河合隼雄共訳, 東京：昭文社, 1974, 1999)
- Reesman, Jeanne Campbell. Introduction, ed. *Trickster Lives : Culture and Myth in American Fiction*. By Reesman. Athens : U of Georgia P, 2001.
- Tanrisal, Meldan. “Mother and Child Relationships in the Novels of Louise Erdrich.” *American Studies International* 35 Oct (1997) : 67–79.
- Yamaguchi, Masao (山口昌男). 『道化の民俗学』 東京：新潮社, 1975, 1981.

——大学院文学研究科研究員——